

勝林寺住職報

勝林寺住職（その2）

「お節介焼き」。これはどうやら勝林寺住職個人の特質というのではなくてこの家の「家風」であったと思います。お節介ということばは、いいにつけ悪いつけ世間の節度を超えて人のことに介入すると云うことだそうですが、わたし、子どもごろに記憶をしていることは、祖母や母の時代（昭和初期）、勝林寺にはやたら人が、それも今でいう失業者風な人が、使用人というか食客というかいつも何人かいました。そのうえ当時、支那人・朝鮮人・日本人のもの売り（紐売り・衣服売り・棕櫚ぼうき商などなど）いわゆる行商人がしょっちゅう泊まっていました。そんな人達からいろんな話を聞いたり賑やかに交流することが何か我が家に活気をもたらしていたようでした。

それが今度日中戦争時代に入ると人ごとでない親族の世話に移つていきました。住職の妹一家が都会での生活が出来にくくなり三人の子どもをつれて療養がてら疎開して移りすんで来ました。（大学教授の妻だったその妹は戦時中この寺で死去）。また、隆雄住職の一番下の弟は、戦後満州から一家上げて出石の寺に帰つて来ました。その一家のすべての世話を背負いこんで隆雄住職夫婦は東奔西走していました。

隆雄住職は、そんな身内の世話だけではなく、大東亜戦中、敗戦の二年間「学童疎開」（神戸の長楽小学校）を受け入れました。あちこちの食料の調達だけでも大変なお世話であつたに違いありません。

戦後は教育委員に立候補（落選）。豊岡市出石町合併問題交渉委員（決裂）などのことにも熱心に取り組んでいました。出征して住職不在の寺の「代務住職」も自分で買つて務めました。

終戦時の混乱が一段落すると今度は、寺・宗門のことがのしかかって来ました。先ず

昭和二十三年の春「蓮如上人遠忌法要」。出



に阿部大悟本願寺総務、雅樂演奏に大阪天王寺の雅樂会「雅亮会」（がりょうかい）を招聘してお

に

先ず

は宗会（當時まつりまつり）（西本願寺では国

に先駆け議会制度を敷いていました。）に兵

行政単位を「組」（ソ）というになり、今度

に取り組みました。本山近くの西教寺という

寺に改革派3人（豊原・神田とのちの総長）

で下宿。わたしはそのころ竜谷大学生。食事

の世話をさせられました。一期4年でそれを

終え寺のことに専念出来るようになります。

そう、なつても仕事を次々見つけだし懸命

に働いていました。「私は中継ぎ」という立

場を堅持していました。

まず、家庭内のこと。女の子二人をそれぞ

れ神戸と龍野の寺に嫁がせます。次に後継住

職のわたしに伴侶を迎えること。あちこちお

見合いに連れて行かれました。最終的には、

工藤成性という先生（竜谷大学教授）の口利

きで島根県温泉津町西田瑞泉寺三女三明瞭子

と結婚しました。昭和二十七年の春でした。

以降十年間は本格的な「お節介焼き」の生

涯でした。近隣の寺の建築があれば毎日終日

そこへ出掛けあれこれお節介。ご門徒の仲人

総仕上げ」といってそれから十年かけて主に

本堂内部の改装工事を進めました。内陣の金

箔はり、壁面・襖・天井の絵つけ。下陣の畳

み替え・向拝（こうはい）階段を含んだ椽板全ての

張り替え。昼夜付ききりで一気に工事を進め、

それが完了した昭和三十六年住職を次の「哲

俊」わたしに手渡し「伝灯繼職奉告法要」を

勤め引退しました。この間の十年。あたらし

く来た暁子が隆雄住職の秘書でした。人の応

対は明るく、ご門徒の電話番号から子どもたちまで完全に記憶し、特に計算に秀でてい

ましたから特に団体参拝の引率など打つつけ。先に云つた諸工事推進に当たつても工事

の人達の宿泊・食事の接待など自ら楽しんで

いました。

隆雄住職は引退して間もなく過ごせたのは何

よりもさして不満不平なく過ごせたのは何

より有り難いことでした。

哲俊住職、わたしは、昭和五十五年まで地

元の出石高等学校につとめ、退職後すぐに兵

庫教区の教化推進委員に推薦いただき「連研

読本」「同朋読本」などの編集へ参画。教区

内の「組画更」に携わりました。続いて豊

原大成先生・西脇正文先生らに推されて本山

中央の基幹運動推進委員に任命されました。

全国各地へ「基幹運動推進」の研修会に派遣

されました。最後にご門主さまにご指名をうけ

「全国ご巡教のご門主さまの隨行講師」と

して昭和六十一年から平成二年まで勤めまし

た。ご門主から直接ご指導をうけられたのは

生涯の賜物でした。

「出石組連研」は宮本・幡多組長とともに全

国でトップの開始。わが寺の「勝林寺寺報」

は昭和五十八年創刊以来「回の休刊なく続

いているは一代の坊守やご門徒のご協力の

よ

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

未来は
待つていても来ない

「未来」というのは20年・30年先。そのときこうなつたらと願い、あなりいと祈る。

たいていが当てはずれで、そこに至つて慌てふためき後悔し恨んだりする。

仏法では、「未来」を「今」の「わたし」のなかに見る。

「今の私」をみれば、「地獄必定（じごく・ひづけ）」、地獄にしか行きようのない私の未来が見えて来る。

その「今の私」に「今、現に在（いまして）て法を説く」如来さまの願心を聞けば、未来を待たずとも、いま救われている「いのちの充実感」をもつことができる。

その「今の私」に「今、現に在（いまして）て法を説く」如来さまの願心を聞けば、未来を待たずとも、いま救われている「いのちの充実感」をもつことができる。

その「今の私」に「今、現に在（いまして）て法を説く」如来さまの願心を聞けば、未来を待たずとも、いま救われている「いのちの充実感」をもつことができる。

その「今の私」に「今、現に在（いまして）て法を説く」如来さまの願心を聞けば、未来を待たずとも、いま救われている「いのちの充実感」をもつことができる。

二月 勝林寺 予定

二日（土） 勝林寺仏事 総会

三日（日） 永井 實宅 忠明法要

五日（火） 岩出酒一郎宅 二三・五十回忌

八日（金） 金久英明宅 一周忌

九日（土） 永井哲雄宅 一周忌

十日（日） 龟井博文宅 一周忌

一一日（月） 仏婦評議委員会

二二日（火） みのりを聞く会

（敬称略）

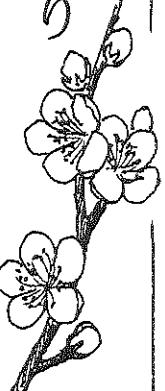
平成二十四年十二月二十七日

葬儀

矢根 永井 勝正様 九十三歳

立春

聞と光り



西洋哲学の祖とよばれる「ターレス」は起源前550年頃小アジャヤの港町ミレトスで活躍しました。当時一般に信じられていた神話的な世界観を否定し、理性的に世界のアルケイ（原理）を探求しました。そして世界の根源は「水」と結論づけた最初の科学的哲学者です。雨風も地震も人間の身体的生命もみな「水」の働きと捕らえたのです。その彼が出した結論はともかく、そう考えた動機についての面白い話があります。

彼は空を見上げ一心に、この世界の根源はと考えながら夜道を歩いていました。獸を捕る落とし穴に気づきませんでその穴に墜ちて腰を抜かしてしまいました。通りかかった人達から嘲笑を浴びせられ惨憺たる状態。その不細工で惨めな大先生がその落とし穴で空を仰ぎ初めてハッと世界のアルケイに気づいたというのです。

以後古代の天文台は深い穴のなかに設置されたと云うのです。

東洋にも同じ考え方があります。

孔子さまは一生「学習」の人でした。その言行録『論語』の巻頭学而第一に「学んデ時ニコレヲ習ウ、マタ悦コバシカラズヤ」。「学は倣なり」といつて先人の言葉や行動を知り覚えること。「習」はそれをわたしも身をもつて「実践」してみなさい。そこに学習の悦びがあるんだということです。また論語には「学ビテ思ハザレバ罔（ラク）ク、思イテ学バザレバヌハチ殆（アヤシ）シ」。知識として人の云つたことをいくら覚えて、その知識を自分の暮らしの中で主体的に思考しなければ無知と同じだ。しかし反対に自分の独り合点は危険だよ」。知識としていろんな本を読み学説や知識を覚えてひととど「学者ぶる人」（蓮如さまはこれを聖教読みといいました）がいます。蓮如さまは「聖教読みの聖教しらずあり」と警告しました。こんな人はむしろ危険な人だと孔子さまは云うのです。宗教の世界にも先人の言葉をなるべく多く覚えてその言葉・学説を整理分類した「論

題」なるものを互いに比較論争する「会読」(がごく)なるもので「教學」を競う傾向があります。真の「宗教」に暗いばかりか危険だと孔子さまは警告なさるのです。

仏法にも「聞・思・修」ということが云われています。

三学と云います。聞きなさい学びなさい、そして自分の日々の暮らしの上に思い見てみなさいそしてなお、それを生きてみることです。

古人のことばに

月光あまねくかがやきて 松柏の影 重く

深きを知る。
松柏の影深く重きは 月影さやかなるゆえ
と知る。

親鸞様は晩年、混乱混迷の世を悲惨な人間苦にさいなまれながら同じ階層の庶民の中に暮らしました。そのなかで、獨世を照らし罪業を救う如来の光と願いに逢いました。

真宗を学ぶとはそうした親鸞さまの「生きさま」を仰ぐのです。

親鸞さまは著書のうえではほとんど「自分のこと」を語りません。親鸞様の晩年の「生きさま」を知るには同じ時代同じ社会とともに生きた人々の声やその人たちと共に唱和した「じ和讃」、妻の恵信尼さまのお手紙それと再晩年弟子唯円の書き残した『歎異抄』という宗祖言行録などです。次号からこれらを通して親鸞様の生きさまを伺ってみましょう。

平成二十五年度

勝林寺年間行事計画

すん

今年の十一月二十一・二十二日に勤まつた勝林寺の報恩講のあと、例年のように各門徒の家の報恩講が始まりました。そして、さる一月二十四日全日程を終えさせていただきました。待ち受けてくださった皆様には、準備等いろいろお世話をおかげしたことでしょう。また、いろいろ心温まるおもてなしをいただきありがとうございました。皆様のおかげで、住職も二ヶ月で約200回の正信偈を、最後まで元気にあげさせていただけました。

「〇〇さん、元気にしとんなつたわ。」

お参りから帰ると、住職は、たいてい何から報告をしてくれます。最近、寺のお参りはもちろん、地区の中でも顔が見えないと聞いて案じていた方が、お家のお仏壇の前でお参りしてくださったと聞き、安心します。

「〇〇さんところの猫が膝の上にのつてきてくれた。」

と聞くと、猫好きの私は、うらやましくて、私もお参りしたかったなあと思います。それぞれのおうちの方の息づかいを感じます。

それにもしても、一年に一度必ずお家に伺つてすゞいことだなあとつくづく思います。

だつて、家を離れ、それぞれに家庭を持てば、兄弟や親子でもなかなか会えないことが多いと聞きます。また、電話やメールで用を済ませてしまい、家を訪ねて顔を合わせることも減つているようです。寺は、「死」を通してつながる葬儀やご法事の時以上に、日々の「生」の中で深くつながり、いろいろなお話を共有させていただきました。改めて思わせていただきました。だからこそ、「死」を迎えたとき、それまでのつきあいのつながりの中で、間違なくお淨土にお送りする役目が果たせるのだと思います。（文責 坊守）

十一月	二十六日	敬老報恩講
十一月	二十六日	おみがき奉仕
十一月	二十七日・二三日	報恩講
十一月	七日・八日	合同役員会
二九日	親鸞聖人	750回大遠忌法要

三一日 除夜会

FESTIVAL

